

## シラバス作成に関するプレFDの効果<sup>†</sup>

根岸千悠<sup>\*1</sup>・大山牧子<sup>\*1</sup>・浦田 悠<sup>\*1</sup>・村上正行<sup>\*1</sup>・佐藤浩章<sup>\*1</sup>

大阪大学全学教育推進機構<sup>\*1</sup>

本研究では、大学教員を目指す大学院生を対象としたプレFDプログラムの中で、①受講生がシラバスを実際に作成し、プレFD受講前後でシラバスが変容するのかを比較するとともに、②受講後に実施したアンケート調査から、シラバス作成の学習に対する受講生の認識を分析した。その結果、プレFD受講により、シラバス全体の文字数は増加し、特に「目標」「成績評価」「メッセージ」の項目において増加が顕著であった。また、目標に活用されている動詞にも変化が見られた。事後アンケートの結果からは、シラバスの役割について、コースカタログという意味合いを超えた理解へとつながった受講生がいたことが示唆された。

キーワード：プレFD, シラバス, 大学院生, 授業設計, 学習者中心

### 1. はじめに

近年、大学院生を対象とした教授能力開発プログラム（以下、プレFD）が実践されている。2019年には大学院設置基準が改正され、すべての大学院において、プレFDの実施もしくは情報提供に努める必要があることが示された（文部科学省 2019）。現在行われているプレFDでは、授業設計や教授法、学習評価などの基本を学ぶ内容が組み込まれているが、授業設計の基本においては、シラバスの作成が含まれていることが多い（今野 2016など）。

シラバスは、1991年の大学設置基準の大綱化から、授業計画の作成・公表が求められるようになり、文部科学省（2020）の調査によれば、2018年度現在、「すべての科目でシラバスを作成している学部を有する大学」はすでに99.6%に達し、およそすべての大学がシラバスを作成している。また「学部段階において、カリキュラム編成上の取組として、シラバスの作成にあたり、内容を担当教員以外が検討・修正する機会を設定している大学」が2012年度は53%であったのに対し、

2018年度は88%に上昇しており、近年、作成のみならず、質の向上も進められている。日本において、当初、シラバスは「コースカタログ（授業要覧）」という意味合いが強かったが、大学教育において、いわゆる「教授者中心から学習者中心へ」と教授学習観が変容したことで、シラバスの内容にも変化が見られるようになった（根岸ほか 2019）。例えば、最近では、準備学習等、授業外の学習に関する記述が増加傾向にあり（文部科学省 2020）、より詳細な記述が求められるようになってきている。

このような学習者中心の詳細なシラバスを作成することの意義について、RICHMOND *et al.* (2016) は、教員中心のシラバスと学習者中心のシラバスに対する学生の認識を比較し、学習者を中心に記述されたシラバスを使用した教員の方が、創造性や、思いやり、受容性、信頼性、熱意などがあると評価されることを示している。

以上のように、昨今では、政策としてのみならず、学習効果を高めるためにも、充実したシラバスの作成が求められているといえる。さらに最近では、大学教員の公募の際にシラバスの提出を求められることも少なくない。例えば、研究人材の求人ポータルサイトであるJREC-IN Portalで「シラバス」とフリーワード検索すると、2021年3月23日現在、2815件中114件の公募が該当し、提出すべき書類の中に、採用後に担当予定の科目のシラバスが含まれている大学が確認できる。ここで求められるシラバスは単なるコースカタログで

2021年4月2日受理

<sup>†</sup> Chiharu NEGISHI<sup>\*1</sup>, Makiko OYAMA<sup>\*1</sup>, Yu URATA<sup>\*1</sup>, Masayuki MURAKAMI<sup>\*1</sup> and Hiroaki SATO<sup>\*1</sup>: The Effectiveness of Preparing Future Faculty Program on Syllabus Design

<sup>\*1</sup> Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University 1-16 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka, 560-0043 Japan

はなく、上記のような役割を持つシラバスであると考えられる。しかしながら、大学院生の時にシラバスを書いた経験は極めて稀であり、ウェブサイトに掲載されている各大学のシラバスや、これまで受講した授業のシラバスなどを参考にして作成することが多いと予想される。このような状況の中、大学教員を目指す大学院生にとって、シラバスについて学び、作成する機会は重要であり、実際に前述のようにプレFDにおいてシラバス作成についての学習が行われている。しかし、プレFDでのシラバス作成を通じた学習効果の検討はなされていない。そこで本研究では、プレFDにおいて、①受講生がシラバスを実際に作成し、受講前後でシラバスが変容するのか、変容している場合、どのように変容しているかを比較し、考察する。②受講後にアンケート調査を実施し、シラバス作成の学習に対する受講生の認識を分析する。これらを通して、プレFD受講生のシラバスの内容や認識の変化について検討することを目的とする。

## 2. 方 法

### 2.1. 授業実践の概要

大阪大学では、プレFDとして、将来大学教員になることを目指している大学院生（修士課程・博士課程）を対象に、大学教育に関する知識や技能を身につけることを目的としたプログラムを実施している。本研究では、そのプログラムの必修科目の1つである「大学授業開発論Ⅰ」（2単位）において、シラバス作成に関する授業を実践した。2020年度は表1に示す内容について、3日間の集中講義で行われ、新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン（同期型・非同期型の組み合わせ）で実施された。

1日目の「シラバス」の回では、シラバスの意義と役割を理解し、事前に作成したシラバスを、より学生の学習を促す効果的なものへと改善することを目指している。受講生には事前課題として「1年生（非専門）を対象とした入門的な科目のシラバスの作成 ※シラバスの様式は自由（大阪大学でも非常勤講師先等の機関のものでもかまわない）※3日目の模擬授業をする際の科目になるため、自分の専門分野や教えられそうな内容で作成すること」のみが指示され、LMS（Learning Management System）にて提出することが課せられた。そして、事前課題提出後の授業を次のように構成した。

表1 2020年度「大学授業開発論Ⅰ」授業概要

|    |  |
|----|--|
| 目的 | 将来、大学教員として授業を担当する際に最低限必要な授業デザインならびに教授技法を身につけること                      |
| 形式 | オンデマンド型（非同期型）とリアルタイム型（同期型）を組み合わせたオンライン授業                             |
| 内容 | 1日目（10:00-18:30）<br>・オリエンテーション ・講義演習(1)<br>・シラバス ・グラフィックシラバス<br>・講義法 |
|    | 2日目（10:00-18:30）<br>・講義演習(2) ・アクティブラーニング<br>・学習評価 ・ルーブリック ・模擬授業の準備   |
|    | 3日目（10:00-18:30）<br>・模擬授業とピアディスカッション(1)(2)<br>・動機づけ ・教育の抱負 ・全体のふりかえり |
|    | ※受講生に配布されたシラバスをもとに筆者作成   |

- ①【非同期型】シラバスの作成に関する講義動画や『大阪大学シラバスハンドブック』（PDF）を閲覧し、事前に作成したシラバスを修正し、指定されたツール（Padlet）にアップロードする。
- ②【同期型】講義動画等の理解度を確認するために、学習目標に関するグループワークをする。
- ③【同期型】修正したシラバスをピアレビューする。

①の講義動画は、東京大学ファカルティ・ディベロップメント（東大FD）のウェブサイトに掲載されている「インタラクティブ・ティーチング」（<https://www.utokyoofd.com/mooc/attend>）の中の「WEEK5 もっと使えるシラバスを書こう」のうち、『もっとある！シラバスの役割』（約9分）、『目的と目標の設定』（約14分）、『授業スケジュールのデザイン』（約11分）の3本を活用した。これらの動画は、2014年～2016年にMOOCのプラットフォームである「gacco」において開講されていたオンライン講座の中で配信されていたものであり、東京大学が実施しているプレFDの蓄積をもとに構成されている（栗田・日本教育研究イノベーションセンター2017）。そのため、大学教員を目指す大学院生にも分かりやすく、また1本の動画が15分弱にまとめられており、プレFDのオンライン授業に適していると考えた。

②の学習目標に関するグループワークでは、講義動画の内容を理解しているかどうかを確認するため、あるシラバスの学習目標欄に書かれている事例を提示し、問題点と書き直し文をグループで議論する時間を設けた。具体的には「傾聴力のトレーニングを通して、思いやりのある人間になる」などの学習目標の記述事例

を3つ示し、受講生はオンライン会議システム (Zoom) のブレイクアウト機能と Google スライドを用いて、グループで問題点と書き直しを討議した。その後、グループで考えた書き直しを発表し、担当講師がフィードバックのコメントと改善案を解説した。

③のピアレビューでは、異なる分野でペアを組み、①の動画および②のグループワークで学んだ内容を踏まえて、フィードバックし合う機会を設けた。

その後、2日目の授業までに、上記①②③の学習内容を踏まえて改訂版をLMSに提出するよう指示した。

## 2.2. 対象

分析は、2020年度X学期の受講生25名のうち、事前課題のシラバスの初稿と授業後の改訂版、ならびに授業後のアンケートの3点について、提出あるいは回答があった23名を対象とする。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 受講前後のシラバスの比較

シラバスが受講前後でどのように変容するのか、①文字数、②学習目標で活用されている動詞の観点で比較した。シラバスを前述した役割を担うものにするためには、内容の充実が図られる必要がある。そのため、まずは文字数に着目し、どの項目がどの程度詳細なものに変化するのかを確認した。また、授業設計は目標に向けた計画を立てることであり (市川 2015)、適切な動詞を用いて明確な目標を立てることが重要とされる (PALMER *et al.* 2014)。そこで、学習目標で活用されている動詞に着目して比較した。

まず、授業前後のシラバスの各構成要素 (以下、項目) の文字数の変化について、各項目の文字数の平均値の差異を対応のある *t* 検定で比較し、その効果量 (Cohen's *d*) を算出した。その結果、表2に示すように、全体の文字数 (科目名等も含めたすべての文字数) は、平均1412.35字から2379.39字と増加し、「授業外学習」を除く項目に有意差が見られ、特に「目標」「成績評価」「メッセージ」の項目は効果量の値も十分であった。なお、「特記事項等」とは、受講上のルールや欠席の対応、合理的な配慮が必要な受講生への連絡事項などであり、「メッセージ」とは、受講に向けての歓迎の言葉などが書かれている項目である。「メッセージ」欄については、最初23名中16名は項目を立てていなかったが、事後では新しく項目を立てて記載されていた。

以上より、「授業外学習」の項目はあまり具体的にできなかったものの、その他の項目においては、より詳

述したり、新規に項目を立てて記載したりしていたことがうかがえた。

次に、学習目標で活用されている動詞の変化を確認した結果を表3に示す。事前課題では「理解する」「身につける」など「定量化しにくい動詞 (non-quantifiable terms) (PALMER *et al.* 2014) が用いられ、事後では「説明する」「述べる」など評価しやすい動詞の活用が大幅に増えていた。特にブルームの教育目標の分類における認知的領域のなかで比較的低次の「知識」「理解」レベルの目標に活用される動詞 (榊原 2016) が多く活用されるようになったことがわかった。これは、1年生 (非専門) を対象とした授業のシラバスであることが関係しているとうかがえる。

### 3.2. シラバス作成の学習に対する受講生の認識

授業の事後アンケートでは、本実践の学習目標である「学習を促す授業をデザインし、シラバスとして表現することができるようになった」かに対して、23名中11名から「非常にそう思う」、12名から「そう思う」

表2 平均文字数の変化

| シラバスの構成要素 | 事前       |           | 事後       |           | <i>t</i> | <i>d</i> |
|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|
|           | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |          |          |
| 目的・概要     | 184.43   | 126.51    | 268.35   | 178.61    | 3.41**   | 0.54     |
| 目標        | 101.26   | 55.73     | 203.13   | 145.68    | 3.37**   | 0.92     |
| 授業計画      | 466.78   | 278.08    | 707.57   | 423.09    | 3.45**   | 0.67     |
| 授業外学習     | 63.00    | 141.97    | 98.43    | 177.47    | 1.58     | 0.22     |
| 成績評価      | 51.96    | 47.91     | 227.48   | 233.82    | 3.60**   | 1.04     |
| 特記事項等     | 60.43    | 99.66     | 93.22    | 94.52     | 2.46*    | 0.34     |
| メッセージ     | 30.57    | 52.27     | 128.17   | 98.28     | 4.50**   | 1.24     |
| 全体        | 1412.35  | 579.57    | 2379.39  | 930.37    | 7.04**   | 1.25     |

\**p* < .05, \*\**p* < .01

表3 目標の動詞の変化

| 動詞    | 事前        |  | 事後   |           |
|-------|-----------|--|------|-----------|
|       | 頻出数(%)    |  | 動詞   | 頻出数(%)    |
| 理解する  | 13 (14.3) |  | 説明する | 40 (26.3) |
| 説明する  | 10 (11.0) |  | 述べる  | 13 (8.6)  |
| 身につける | 9 (9.9)   |  | 列挙する | 10 (6.6)  |
| 知る    | 5 (5.5)   |  | 記述する | 8 (5.3)   |
| 分析する  | 4 (4.4)   |  | まとめる | 7 (4.6)   |
| 考える   | 3(3.3)    |  | 分析する | 5 (3.3)   |
| 応用する  | 2(2.2)    |  | 応用する | 3 (2.0)   |
| 表現する  | 2(2.2)    |  | 考察する | 3 (2.0)   |
| まとめる  | 2(2.2)    |  | 調べる  | 3 (2.0)   |
| 学ぶ    | 2(2.2)    |  | 表現する | 3 (2.0)   |
| 養う    | 2(2.2)    |  | 理解する | 3 (2.0)   |

※太字は目標記述のための動詞 (榊原 (2016) 等を参照)

という回答を得た。このことから、学生の自己評価としては、高く評価していることがうかがえた。

また「『大学授業開発論Ⅰ』の最大の学びは何ですか？(200字程度)＊テキストシラバス・グラフィックシラバスの作成，3分間の模擬演習，90分の授業計画書の作成，ルーブリックの作成，10分間の模擬授業，教育の抱負の作成，授業中の講義，ペア・グループワーク等を通して学んだことを具体的に書いてください」という質問に対して、「シラバス」を挙げた回答(23名中12名)には、次のようなものが見られた(「グラフィックシラバス」のみを挙げた回答は除いている)。『シラバスの作成からは目標や評価を要点として体系だった計画を練ることの重要性を学ぶことができた。それを意識したうえで、個々の授業計画や模擬授業を組むことでより効果的な教育の実施につながると実感できた』『シラバスが教員と受講生との契約書であるといわれたことが心に残っています。特に自分の学部時代にはシラバスを意識して読むことはありませんでしたが、学生主体で記述するということや受講生に対する熱いコメントも重要な要素であると感じたことは大きな収穫でした』『シラバスが学生の履修選択の要因になるだけでなく、講師と学生間の双方向的な契約書であること』などである。これらの記述から、シラバスを単なる「学生が授業を選択するための役割」という、コースカタログの意味合いを超えた理解へとつながった受講生がいたことが示唆された。

#### 4. おわりに

本研究では、大学教員を目指す大学院生を対象としたプレFDにおいて、①受講生がシラバスを実際に作成し、受講前後でシラバスが変容するのかを比較するとともに、②受講後にアンケート調査を実施し、シラバス作成の学習に対する受講生の認識を分析した。その結果、シラバス全体の文字数は増加し、特に「目標」「成績評価」「メッセージ」の項目において増加が顕著であった。また、目標に活用される動詞が、より評価可能な動詞へと変化していた。事後アンケートの結果からは、シラバスの役割の理解が促され、コースカタログという意味合いを超えた理解へとつながった受講生がいたことがうかがえた。ただし、受講生によっては事前のシラバス作成時に書籍等で学習している可能性もあり、本プレFDのみの効果であるとは言いきれない点に留意する必要がある。今後は、本研究で得ら

れた知見を踏まえて、シラバスを評価するためのルーブリックを開発し、学習目標と教授方法と成績評価の一貫性の有無など質的な分析を進める必要がある。

#### 謝 辞

本研究は JSPS 科研費20H01696, 20K14080の助成を受けたものです。

#### 参 考 文 献

- 市川 尚 (2015) 学習目標を明確にする～授業構想の検討～. 稲垣 忠, 鈴木克明 [編] 教師のためのインストラクショナルデザイン 授業設計マニュアル Ver.2, 北大路書房, 京都, pp.27-37
- 今野文子 (2016) 大学院生を対象とした大学教員養成プログラム(プレFD)の動向と東北大学における取組み. 東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要, 2: 61-74
- 栗田佳代子, 日本教育研究イノベーションセンター(2017) インタラクティブ・ティーチング・アクティブ・ラーニングを促す授業づくり. 河合出版, 東京
- 文部科学省 (2019) 学校教育法施行規則及び大学院設置基準の一部を改正する省令の施行等について (通知). [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1420657.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1420657.htm) (参照日 2021.03.31)
- 文部科学省 (2020) 平成30年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要). [https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt\\_daigaku03-000010276\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20201005-mxt_daigaku03-000010276_1.pdf) (参照日 2021.03.31)
- 根岸千悠, 浦田 悠, 大山牧子, 野瀬由季子, 佐藤浩章 (2019) シラバス作成支援のためのルーブリックの試作. 日本教育工学会研究報告集, 19(3): 1-8
- PALMER, M. S., BACH, D. J. and STREIFER, A. C. (2014) Measuring the promise: A learning-focused syllabus rubric. *To Improve the Academy*, 33(1): 14-36
- RICHMOND, A. S., SLATTERY, J. M., MITCHELL, N., MORGAN, R. K. and BECKNELL, J. (2016) Can a learner-centered syllabus change students' perceptions of student-professor rapport and master teacher behaviors? *Scholarship of Teaching and Learning in Psychology*, 2(3): 159-168
- 榊原暢久 (2016) シラバスを作成する. 中島英博 [編] 授業設計. 玉川大学出版部, 東京, pp.55-70

(Received April 2, 2021)